

読売新聞夕刊(2015年5月1日)記事より

2015年5月1日付の読売新聞夕刊(東京)の記事からです。われわれのところで胎児鏡下レーザー手術を受けられた酒井さんとそのご家族のその後が紹介されています。

夕刊 読売新聞 (第3種郵便物認可)

2015年(平成27年)5月1日(金曜日)

「命救う側へ」母の決意

おなかにいる双子の赤ちゃんが重い病気にかかり、1人を生後間もなく失った山形県米沢市の酒井文子さん(37)が今春、看護師になった。自分の経験を踏まえ、一人でも多くの命を救いたいと、医療従事者の側に立つと思ったという。「患者や家族の気持ちに寄り添える看護師になりたい」と意気込んでいる。

山形の女性 看護師合格

子供失った体験 胸に

2007年5月、県内の病院で「赤ちゃんの様子がおかしい」と告げられ、胎児治療に取り組む医師がいる東北大病院(仙台市)を紹介された。検査の結果、胎盤を通じて流れる血液が1人の赤ちゃんに偏る「双胎間輸血症候群」と診断された。このままでは2人も死亡する恐れがあると言われ、手術を受けることを決意。病院の屋上から見た空にちなみ、おなかにいる双子の女の子を美空ちゃん、美晴ちゃんと呼びつけた。手術は無事に終わったが、6月に病気が再発し、妊娠26週で急ぎ帝王切開で出産。美空ちゃんは66

6歳、美晴ちゃんは4歳8ヶ月で、仮死状態だった美晴ちゃんは生後11日で亡くなった。美空ちゃんは奇跡的に助かった。

「なぜ元気に産むことができなかったのか」と悲しみに沈んだ酒井さんは10年12月、当時の状況を詳しく知ろうと、医師に改めて面会。「今の技術なら2人の命を助けられるかもしれない」という医師の正直な言葉に心を打たれ、自分も医療の道に、と決心した。

12年4月、米沢市内の専門学校に34歳で入学し、勉強の末、今年3月に首席で卒業、看護師の国家試験に合格した。4月からは山

形県南陽市の病院で働いている。子供はほかに長女(13)がいる。塗装業の夫・貴司さん(37)が、仕事を早めに切り上げて子供を迎えに行くなど酒井さんを支えている。「美晴は短いながら確かにこの世に生を受けた。美晴に恥ずかしくない生き方をしたい」と酒井さんは言う。小学2年になった美空ちゃんは、1年の時に歯動賞を取るなど元気に育っている。いずれ美空ちゃんには、美晴ちゃんのことを伝えようと思っている。



夫の貴司さん、美空ちゃんと公園で遊ぶ酒井さん(左)。「患者の生きる動みになれる看護師になりたい」(山形県米沢市で)

胎児治療 [にもどる](#)

室月研究室トップ [にもどる](#)

カウンタ 81 (2015年5月8日より)

1